彙報

第十九回野尻湖クリルタイ

岡田英弘

第十九回野尻湖クリルタイは、一九八二年七月十八日(日)から二十一日(水)まで、長野県上水内郡信濃町の野尻湖ホテルにおいて開かれた。参加者は次の五十九名である。

荒川正晴(早稲田大学)、昌彼得(故宮博物院)、陳捷先(台湾大学)、海老沢哲雄(埼玉大学)、二木博史(一橋大学)、後藤晃(山形大学)、浜田正美(京都大学)、林俊雄(古代オリエント博物館)、早田輝洋(九州大学)、堀川徹(京都外国語大学)、細川由紀子(弘前大学)、細谷良夫(同)、池上二良(北海道大学)、石橋秀雄(立教大学)、石橋崇雄(東京大学)、井谷鋼造(京都大学)、石見清裕(早稲田大学)、鄭堤文(東京外国語大学)、蒲原大作(駒沢大学)、神田信夫(明治大学)、片山章雄(上智大学)、片山共夫(九州大学)、加藤和秀(東海大学)、加藤直人(日本大学)、河内良弘(天理大学)、川又正智(国士館大学)、山本芳昭(佐賀大学)、川瀬豊子(大阪外国語大学)、菊池俊彦(北海道大学)、北村高(竜谷大学)、久保智之(九州大学)、松田孝一(大阪大学)、松村潤(日本大学)、関丙勲(早稲田大学)、宮治昭(弘前大学)、宮武志郎(早稲田大学)、宮脇淳子(日本学術振興会)、森川晴(大阪大学)、森川哲雄(九州大学)、森安孝夫(金沢大学)、中見立夫(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)、小田寿典、小谷仲男(富山大学)、岡田英弘(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)、大沢陽典(立命館大学)、佐藤道郎(岩手大学)、沢田勲(金沢経済大学)、島田正郎(明治大学)、庄垣内正弘(神戸外国語大学)、谷憲(金沢大学)、寺内威太郎(明治大学)、堤和彦(立命館大学)、都竹通年雄(富山大学)、植村清二(国士館大学)、梅村坦(東洋文庫)、山田耕一郎(明治大学)、山田信夫(大阪大学)、山本正良(金沢大学)、吉田金一。

見らるるごとく、今年の外国からの出席者は、中華民国の国立台湾大学文学院歴史系教授の陳捷先、国立故宮博物院図書文献処処長の昌彼得のお二人で、この二人は前年十二月に台北で開催された第六回東亜アルタイ学会の主催者であり、かつ同学会に日本から参加した面々が十一名もこのクリルタイに出席していた次第で、さながら東亜アルタイ学会同窓会の観を呈した。

第一日の七月十八日は、夕食の後、簡単な自己紹介とプログラム調整があった。

第二日の十九日は、午前中 Confessions の第一部があった。

荒川はペリオ敦煌文書を研究。池上は「満洲語動詞の終止形――ツングース語動詞との比較」（『京都産業大学国際言語科学研究所紀要』）、「十八世紀のヤクーツクとオホーツク付近のツングース方言について」（『北方文化研究』）を発表、ウイルタの緊急調査で写真集『ウイルタ民族文化財』を出す。石橋（崇）は第六回東亜アルタイ学会で「八旗旗色の成立年代」を読み、「清初バヤラの形成過程」（『中国近代史研究』）を書く。石橋（秀）は『明実録』所載の反乱史料の少数民族関係をまとめる。石見は唐と周辺民族との関係を研究。梅村はテレビ朝日で「中央アジアのトルコ化とモンゴルの支配」を講じ、『中国考古学三十年』（平凡社）の訳を分担、陳正祥『中国歴史・文化地理図冊』（原書房）の説明文を日訳。海老沢はイル・ハーン国から西ヨーロッパに送られた手紙でラテン訳文のみ残っているものの真偽を問題とする。岡田は『北アジア史（新版）』（山川出版社）に八三九年のウイグル帝国の崩壊から一七七一年のヴォルガ・トルグートのイリ帰還に至るモンゴル史を執筆、東亜アルタイ学会では「モンゴル文康熙帝讃歌四篇」を読んだ。小田はハンブルクの A.M. von Gabain 八十歳記念セミナーにおいて「ウイグル語八陽経におけるインド系借用物に関する註釈」を発表、ソグド語経由の語について論じた。小谷は上海、済南、益都、石家荘、太原に旅し、大同、雲岡を見た。片山（章）は「トクズ・オグズと九姓鉄勒について」（『史学雑誌』）を発表。片山（共）は「元朝の失宝赤について」（『九大東洋史論集』）を発表。加藤（和）は「ケベクとヤサウル」（『東洋史研究』）を発表。加藤（直）は東亜アルタイ学会で「伊犁奏摺」を発表。蒲原は「北アジアにおける犬と狼」を民族学博物館の論文集に寄稿。川瀬は "Sheep and goats in the Persepolis royal economy" (*Acta Sumerologica*) を発表。河内は東亜アルタイ学会に出席、『日本における東北アジア研究著作目録』を準備中。天理図書館で道光朝の硃批奏摺多件を発見。川又はイラク考古学調査に参加、アナウで発掘に従事、雑誌『ラーフィダーン』(*Al-Rafidān*) を発刊。「中国古代の戦闘技術」（『小林行雄先生古稀記念論文集』）を書く。川本は「北魏太祖の部落解散と高祖の部族解散」（『佐賀大学教養部紀要』）を発表。

植村は『人物中国の歴史』（集英社）に「フビライ汗とマルコ・ポーロ」を書き、『丸善百年史』上巻前半、明治二～二十五年の部五百五十枚、三百二十頁を完成。神田は「両広総督楊琳の奏摺について」（市古論集）と『北アジア史（新

版)』の満洲史の部を書き、東亜アルタイ学会では『百二十老人語録』の諸本について論じ、これは景印本の解題に収められた。菊池はトゥワ、アルタイ、シベリアにおけるソ連考古学の最近の成果について紹介し、また前年十一月十八日に死去した Okladnikov について「オクラドニコフ先生とシベリア考古学研究」(『窓』)を書いた。北村は『観無量寿経』のウイグル語訳者について研究中。久保は『百二十老人語録』中の ngge に終る従属文の構造を研究。後藤は「エジプトにおける近代教育」(『山形大学紀要』)、「部族小考」(『社会科学の方法』お茶の水書房)を書き、『イスラム事典』に多数の項目を寄稿。佐藤は Csoma de Körös 紀念学会で Sa-skya 派について発表。沢田は護論集にオンギン碑文の年代について寄稿。

島田は「モンゴル法における刑罰の変遷」(『東洋史研究』)、「清律の成立」(『法律論叢』)、「清律化外人有犯条と蒙古例」(同)などを発表。『東洋法史論集』第四集「北方ユーラシア法系の研究」、第五集「清朝蒙古例の研究」が完結。チベット文『アルタン・ハーン法典』を研究中。『理藩院檔案』の所在が判明。『中国法制史料』二輯四冊を出版。四輯にはモンゴル・オイラト法典を収める。

昌は台北の故宮博物院に蔵する清朝檔案四十万件のうち、『宮中檔雍正朝奏摺』が漢文二十八冊、満文六冊をもって刊行が完結することを報告した。

中食後、遊覧船で湖上を一周した。

午後は、Confessions の第二部と、海外事情報告の第一部があった。

谷は『佐口透先生著作目録』の完成を報告した。

陳は第五回東亜アルタイ学会と清史檔案研討会の紀要を刊行し、第六回東亜アルタイ学会の紀要を準備中。自作の論文を集めて『満文清本紀研究』を出版。論文としては Hummel の『清代名人伝略』の満洲語表記法を批評、清太祖朝の満洲の農耕を論じ、蔣良驥の『東華録』撰述の意図を考えた。都竹は日本語方言の研究を専攻し、小説「石勒伝」(『文楽』六号)の作がある。堤は女直史を研究。鄭はモンゴル言語学を専攻、金芳漢に師事。寺内は朝鮮王朝の清朝との辺境貿易を研究。中見はウルムチの中国蒙古史学会で「貢桑諾爾布と内蒙古の命運」を読み、蘭州、フフホトの内蒙古社会科学院を訪問、辛亥革命七十周年紀念東京国際学術会議で読んだペーパーを手直しして、台北の東亜アルタイ学会で読んだ。林はブルガリアに出張。シリアの発掘は完了した。『季刊ユーラシア』が復刊される。早田はアルタイ語の音韻論を研究。閔は宋・元時代の西夏史を専攻。細川は清朝の后妃を研究。細谷は阿南惟敬の『清初軍事史論考』を評し(『東洋学報』)、「天命丙寅年檔」のニルの記載を整理、東亜アルタイ学会に

出席、『鑲紅旗檔』乾隆朝の部を三十年に及ぶまで転写、尚可喜一族の漢軍編成の過程を研究。松田は元の武宗ハイシャンの北辺駐屯を研究、チンギス・ハーン家の国家におけるトルイ家の問題を考え、『野尻湖クリルタイ紀要（二）』を編集。松村は『北アジア史（新版）』の満洲史を分担、東亜アルタイ学会では「シュルガチ考」を読み、『清太祖実録』諸本の系統を研究。宮武はオスマン・トルコ軍事史、ことに大砲技術の伝播を研究。山田（耕）は康熙・雍正朝の八旗生活の変容を研究。山本はオスマン・トルコのヨーロッパ支配に興味を持つ。

海外事情報告としては陳が第二十五回 PIAC (Permanent International Altaistic Conference 七月七日～十一日、スエーデン・ウプサラ）について、山田が三月二十六日～四月十四日のオーストラリア訪問について報告した。

今回の PIAC には十四国から六十二名が参加し、三十の paper が読まれた。Business meeting では Denis Sinor が任期五年の Secretary General に再選され、PIAC Gold Medals は W. Heissig と D. Sinor に授与された。陳自身の paper "Manchu agriculture during the period of Nurhaci and Hong Taiji" は、入関前の大規模農耕を論じた。Stary の paper "On the name 'Abahai'" は、これまで清太宗 Hong Taiji の満洲名と誤り伝えられ、房兆楹も『清代名人伝略』の冒頭に採用している Abahai の起源を求めて、ロシア人の僧 Gorskiy の著 *The Beginning and First Actions of the Manchus*（一八五二年）の英訳本中に、太宗の年号 Abkai Sure（天聰）を Abkhai と記しているのに発見したものである。J. Bosson はチベットに旅行し、五百枚のスライドを示した。Poppe、Sagaster、Vietze、Bosson と陳は終夜六時間飲み明かした。

山田は Sydney、Brisbane、Canberra、Melbourne、Adelaide、Perth を巡訪してアジア研究の現状を視察した。

夕食後、昌が故宮蔵乾隆鈔本蔵文大蔵経のスライドを示し、用意した英文説明を岡田が日文で読みあげた。石橋（崇）は台北の第六回アルタイ学会のスライドを示した。

第三日の二十日の午前は、Confessions の第三部、研究発表の第一部、海外事情報告の第二部があった。

宮脇は三月に大阪大学大学院博士課程を修了、四月から東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究生、七月から日本学術振興会奨励研究員となり四年間引き続き岡田の指導下に研究中。前年七八月はロンドン大学に遊び C. Bawden に会い、十月「十七世紀のオイラット――『ジューン・ガル・ハーン国』への疑問」（『史学雑誌』）を発表、十二月の東亜アルタイ学会では Zlatkin を批判した。内外モンゴル、青海、チベット、オイラットを総合し、十七世紀だけではなく

十五・六世紀にも溯るモンゴル史を志向する。宮治は仏教美術史、ことにインドから中央アジアへの図像の変容を専攻、『インド美術史』(吉川弘文館)に「アジャンタ窟院」を書き、「バーミヤンの飾られたブッダの系譜とその年代」(『仏教美術』)でエフタルの冠飾との関係を考えた。森川(哲)は『人物中国の歴史』の「チンギス・ハーン」を書き、『北アジア史(新版)』を評し(『歴史と地理』)、東洋史研究会では朝鮮史料を利用してチャハルのブルニ親王の乱について講じた。森川(晴)は十八世紀のカザフ民族史の研究を続行。森安は竜谷大学でウイグル文書簡十五点を発見、「元代ウイグル人仏教徒への書簡」、「景教」を書き、ペリオ文書中のチベット字で書かれたウイグル文仏教教理問答を研究。山田(信)、は"An Uighur document of the emancipation of a slave, revised"(*J.A.*)を書き、東亜アルタイ学会に参加。吉田は、「郎坦の吉林九河図」の中訳文が『中央図書館館刊』に掲載され、原図の写真を受け取った。井谷は「モンゴル侵入後のルーム」、「西暦十三世紀の小アジア」を書き、日本所在のペルシア語文献のユニオン・カタログを計画中。大沢は「杜弊の乱とその周辺」を書き、長沙の馬王堆を見た。庄垣内は R.A. Miller, *Origins of the Japanese Language* の村山七郎訳を評し、「中阿含経の研究」(『神戸外国語大学紀要』)、"Ein Uighurisches Fragment"(*Gabain Festschrift*)を書き、丙種本華夷訳語のウイグル語を研究中。浜田は十九世紀の東トルキスタンの反乱のウイグル語文献を研究、『アジア史研究入門』のオスマン・トルコの部を担当。堀川は「一四八八年のタシュケント戦争について」を護論集に寄稿。

研究発表(一)は、庄垣内の「ウイグル語における漢文の訓読について」であった。

ウイグル人は、訓点なる便利な方法を知らなかったが、かれらが漢語仏典と接触する以前に、印欧系の訳語が導入されていたために、音読することができず、訓読した。ウイグル語では、接尾辞で人称を明示する必要があるために、機械的な読みは不可能であった。

海外事情報告(二)は、梅村の「アンカラ、ベルリン近況」であった。

日本学術振興会のテヘラン・センターがイラン情勢の悪化で閉鎖することになり、アンカラかイスタンブルに移すべく、現地事情の調査のため、一月三十一日から四月二十八日までトルコに滞在、ベルリンに一週間を過ごした。アンカラ大学文学部にはシナ学科に、Pulat Otkan、国際研究学科に Mete Tuncoku がいる。イスタンブル大学のトルコ学科は右翼の大トルコ主義を標榜して、アンカラと対立している。アンカラのハジェテペ大学の Talat Tekin、Bozkurt Güvenç、アンカラ大学政治学部の Ruşen Keleş の三人が日本研究の中核

である。日本熱は高く、日本語講座はイスタンブルで続いている。アンカラでも日本学科を作る計画がある。中央アジア研究では Semik Tezcan、Osman Sertkaya がある。東ベルリンでは Peter Zieme のところでウイグル文書数点を見た。西ベルリンでは Dahlem の民族学博物館に資料がある。

研究発表（二）は、片山（章）、宮脇、浜田が行った。

片山「突厥回紇交替期をめぐって」は、登利可汗から Ozmiš に至る系譜が唐史料ではまちまちであること、Sine-usu 碑文と Tariat 碑文の比較によってその間の経緯がある程度うかがわれることを説いた。

宮脇の「『ジューン・ガル・ハーン国』以前のドルベン・オイラット」は、一六二五年、Chin Taisha の死によって、遺産をめぐって起ったその兄弟 Chokur、Baibagish 両タイシャの争いが、これまで誤ってジューン・ガルの内乱とされ、三人はすべてハラ・フラの諸子とされていたのを、実はホシュートのチュイクルとその同母異父弟バイバガス、即ちバイバガス・ハーンとの間の争いであり、バイバガスはこの内乱で殺されたことを明らかにし、この時期のドルベン・オイラットの指導権の所在について再考を促し、また『ザヤ・パンディタ伝』中の諸酋の牧地の記載を分析して、それらが一定せず刻々に変化し、結局ドルベン・オイラットとは、それぞれ一定の領域を持った諸部族の連合体などではなかったことを指摘して、これまでの遊牧国家論への疑問を提出した。この発表については活発な意見が出た。

浜田「十九世紀ウイグル歴史文献序説」は、一八六四年の反乱が東トルキスタンの歴史の大きな転機となったが、これについての研究が、最近ソ連と中国で盛んとなり、それぞれ政治情勢を反映している。ウイグルという民族名は、一九二一年のタシュケント少数民族会議に始まるもので、それまでは十八世紀以来 Chaghatai と呼ばれていた。この言語で書かれた文献には、東トルキスタン方言的要素が多かれ少なかれ混入しているが、その程度は筆者の教養の程度による。一九五〇年代から収集がはじまり、現在約一千点が知られている。内容には事実に即したものと予言的な性格のものとがあり、それぞれ自陣営の立場を反映して、偏向は大きい。こう前置きして、十四種について内容の一部を紹介した。

夕食後、恒例の初参加者の感想、年長者の講評などがあり、宮治がアフガニスタン調査のスライドを示した。

これですべての日程を終り、第四日の二十一日の朝食後、正式に解散した。参加者の一部は、この後でエクスカーションとして戸隠に向った。